

村上真完著

## 『インド哲学概論』

茨田 通 俊

本書『インド哲学概論』は、そのタイトルの通りインドの哲学を体系的に論じた本格的概論書である。これまで仏教に関する概論は存在したが、インド哲学を専門に扱ったものは皆無に等しかった。それだけに同書は、多様なインド哲学の体系をまとめたわが国初の成果として、仏教研究に偏りがちな日本のインド思想研究に一石を投ずるものである。

著者の村上真完博士は、『サートンクヤ哲学研究—インド哲学における自我観—』や『仏のことば註—パラマッタ・ジョーティカー—』（いずれも春秋社 後者は共著）等の既存の書からも知られるように、現在の学界を代表する研究者の一人である。学識豊かな博士の手で本書のような意義ある概論書が書かれたことは、我々研究に携わる者にとって喜ばしい限りである。

なお筆者は、いわゆるインド正統派哲学の研究を専門とする者ではないので、細部について批評するのは差し控えたく、むしろ概論としての効用という観点から本書を論じてみたいと思う。

さて、本書のもつ意義はいくつか考えられるが、最大の特徴は、論題を存在論と認識論に絞ったユニークな構成にあると言

ってよい。これまでインドの諸思想を紹介した概論は、思想史や哲学史といった形を採るのが通例であった。各思想の発展過程や学派間での論争の背景を考慮すれば、歴史的考察のみがインド思想を知る方法とは限らないだろう。本書は主として、諸学派の哲学的思弁が体系化された時代の理論を扱っており、基本的な事項を羅列した入門書や思想紹介に終始する概説の類ではない。上記のふたつの主題を中心にして、系統づけられた哲学思想を論じる本書は、従来の通史に依らない新しい視点に立った概論と言えよう。

また本書では、著者によって「自ら哲学する」ことの必要が説かれる。ただ原典解読や知識の修得で終わらず、自らの思惟を深めることを重視するのである。著者は、三宅剛一及び西田幾多郎の『哲学概論』にそうした姿勢を学び、本書の基本的な構想もこの両書に依っている。自ら考えることにより、インド古来の哲学思想を深く理解するという本書の意図するところが、本文を読む中でも汲み取れるだろう。

本論の内容に目を移せば、著者自身の業績に多くを頼る部分は論考もさすがに深く、引用する文献資料の範囲も自ずと広くなっている。一方、他の箇所も信頼しうる研究に基づいて書かれてあるので、概論として安心して使用できよう。加えて、著者自らの見解も随所に見られ、それが単なる通説に留まらない由縁でもある。このように、本書は専門的な内容にも踏み込んで論じており、全くの初学者は、インド思想に対するひと通りの知識を得てから本書をひもとく方が、著者の意図に沿った利

用が可能と思われる。

そのほか本書の特徴のひとつとして、論証の際に原典が豊富に引用されることが挙げられる。論拠が明示されていることは、読む者の理解を助けるし、引用資料の出典がすべて明確であるので利用するのに都合がよい。また、各思弁の発生源や後の論議の進展に言及する等、本書が通史の形式を採らないからといって、歴史的視点が無視されているわけではない。同時に、他の諸学派との主張の相違にも随時触れられるので、思想の推移と交渉というタテとヨコの関係が、比較的容易に把握できるのである。

また、註記に示されたテキスト、翻訳、研究書の類は、著者も言うようにすべてを網羅するものではないが、それでも充分使用に耐えるものである。本書が単なる知識の提供に終わらず、さらに専門的な研究に臨もうとする学習者への配慮を念頭に置いて書かれていることが察せられる。このように、全体を通じて本書を利用する者への便宜が図られていることは、概論書として高く評価できる点であろう。

概論の体裁上、文は概ね平明で理解し易い。哲学思想を扱う際、読者は認識論関係の術語を中心に、常に原語に基づいた内容把握が求められる。その点本書は、用語のもつ意味を的確に伝えることを考えて、表現に工夫を凝らした跡も窺えるのである（「具有不二元論」p. 102, 「自証」p. 286 等）。

さて本書は、前述したように存在論と認識論のふたつのテーマに大別される。この二種によって基本的な理論の把握は可能

であり、煩瑣になりがちな哲学説の議論を締まったものにしていく。以下目次に従って本書の内容を概観したい。

「序章 インド哲学とは何か」では、本論への導入として、インド哲学の研究姿勢とその目的が問われている。インド哲学研究の方法について、著者はまず従来の研究方法の反省に立つて、原典を深く理解し、その内容を伝える確かな表現力を培うため、自ら考える姿勢を強調している。そして、本書の構成と方針が示された後、*darśana* を初め哲学説及び哲学一般を意味する諸原語について検討、さらに知と哲学の關係に触れ、解脱をもたらす真理の知を探究するというインド哲学の特徴が語られる。

第1章は「世界と自己」と題して、インド哲学諸派の存在論について論じる。自己の本源や世界の原因を探究する存在論は、常にインド哲学の中心的な課題であり、各学派思弁の基調を成すものである。

「第1節 体系以前における種々の模索」では、インド最古のヴェーダ文献に諸思想の始源を求める。そこでは、勢力（潜在力）としての神々、祭祀による自己と神との融合、人間の身心の機能と神格の合一といった神話的な觀念が支配的である。このように、哲学的思索が未体系の時代には、諸原理を抽象的觀念ではなく、神格として捉えているが、そうした考え方の中にも後の哲学的思想の萌芽を窺うことができるのである。

「第2節 哲学（一元論的世界観）の発見」では、宇宙の本源と自己の本体を同置する思弁について、初期の古ウパニシャ

ッドに現れる三人の哲学者の学説を取り上げている。シャーン  
ディルヤ (Śaṅḍilya) のいわゆる梵我一如説に続いて、ウッダ  
ーラカ・アールニ (Uddalaka Aruni) は、万物の根本原因と  
して有 (sat) を考え、最高の神格でもあるこの有からの熱、水、  
食物の三神格の開展を説く。また、ヤージュニヤ・ヴァルキヤ  
(Yajñavalkya) は、人間の身心の機能を自然界との相即関係に  
おいて考察し、宇宙の根本原理 (梵) と個体の最高原理 (我)  
の同一性を説いている。彼らウパニシャッドの哲人の主張に、  
以後の思想の祖型を見ることができよう。

「第3節 二元論の哲学」では、主としてサーンクヤ派の哲  
学の特徴が述べられる。サーンクヤ派の二元論の特徴は、まず  
純粹精神原理 (靈魂) を心身から区別する点にある。ここでは、  
初期の古ウパニシャッドに始まる関連資料の考察に続いて、『サ  
ーンクヤ・カーリカー』 (Sāṃkhya-karika) において確立され  
る二つの実体的原理、純粹精神ブルシャ (puruṣa) と根本原質  
プラクリティ (prakṛti) の性質を詳述し、二元論を超越して一  
元論を志向する後代の思弁に論及する。さらに、サーンクヤ派  
哲学の特色のひとつである転変説 (pariṇāma-vāda) 、因中有  
果論 (sat-karya-vāda) にも言及している。以上のように多様  
な文献資料を駆使して、二元論哲学の変遷が論じられるのであ  
る。

「第4節 一元論の哲学」では、ブラフマン (梵) が世界の  
質料因 (upādāna) にして、精神的存在 (cetana) であると説く  
ヴェーダーンタ派の基本聖典『ブラフマ・スートラ』 (Brahma-

śūtra) の主張を受けて、同派を代表する三人の学者の見解が示  
される。梵はいかなる属性 (guna 徳) をも欠いた絶対無差別  
なるものであるとするシャンカラ (Śaṅkara) の不二元論、  
梵が無数の善美なる属性をそなえた主宰神であり、あらゆる精  
神と非精神に限定され、それらを具有することを説くラーマ  
ーヌジャ (Rāmānuja) の具有不二元論、主宰神である梵と世  
界や個我との差別を強調したマドゥウヴァ (Madhva) の二元論、  
以上の三者の解釈の対照が明確に捉えられている。

「第5節 多元論の哲学」では、まず、アジタ・ケーサカ  
ンバリン (Ajita Keśakambalin, 四要素説 等六師外道の諸師、  
ジャイナ教の五原理 (六実体) から成る世界観、原始仏教の五  
蘊十二処十八界の理念や十二縁起に見られる分析的思考法が簡  
潔に述べられる。こうした非正統派諸思想に対し、より明確な  
多元論的世界観を構築するものとして、世界を諸要素の集合と  
考え (積集説 sraṃbha-vāda) 、実体 (dravya) を初め密接に  
関係した六の範疇 (padārtha) を立てるヴァイシエシカ派の  
体系が示される。そして、このヴァイシエシカ派の範疇論は、  
他学派にも通じるものがあることを指摘している。さらに、ア  
ートマン論証、アートマンの一・多と遍在性の問題について、  
『ヴァイシエシカ・スートラ』 (Vaiśeṣika-sūtra) の注釈書類  
や諸学者の説により、『サーンクヤ・カーリカー』に見られるブ  
ルシャ (靈魂) 観と比較しながら論じている。

「第6節 唯物論と唯心論」では、最初に、靈魂の永続性を  
認めず、快樂主義に立つローカーヤタ (順世派) の唯物論につ

いて論述する。次に、仏教伝統の心の分析的観察を承けて、現象界は心の表象に過ぎず、それはアーラヤ識の転変であるという唯識説の体系が、世親 (Vasubandhu) の『唯識二十論』(Vijñānīya Vijnapti-matratva-siddhi)、『唯識三十頌』(Trisatiha Vijnapti-matratva-siddhi) に沿って展開される。さらに中観派の哲学としては、原始仏典に由来する空性 (śūnyatā) についての基本的な考え方、矛盾した立言を同置する般若経類特有の思考法、すべてのものは固定的な実体、本性をもたない(無自性)空であると考ええるナーガールジュナ (Nāgārjuna) の『中論』(Mādhyamaka-kārikā) に論及する。そして、唯識説の『識の』有(存在すること)という固定的な観念に対する中観派の批判が示されている。

第2章では「認識の構造」として、哲学体系形成以後における各学派の認識論がまとめられている。認識論は、諸学派が独自の思想を展開する上で重要な位置を占めるものであり、上述の存在論も認識論との密接な関係を抜きにしては語れない。

第1節の「序説」では、まず認識成立の諸要件として、認識手段 (pramāṇa) 等の用語について検討する。そして、学派によって種類と数が異なる認識手段のうち、直接知覚 (pratyakṣa)、推理 (anumāna) を初め、聖言量 (śabda, āgama) 等について説明を施す。なかでも推論の項では、古典論理学の要旨が示され、初学者には有益な導入となっている。また、ジャイナ教の特徴的な認識手段の分類等にも触れる。さらに、實在論的な無形象知識論、観念論的な有形象知識論に関する議論を、説一切

有部、経量部、唯識派等仏教諸学派やディグナーガ (Dignaga)、ダルマキールティ (Dharmakīrti) 等の主張に基づいて論じている。

「第2節 實在論学派の認識の構造」では、認識主観の外に対象が実在すると考える学派として、ニヤーヤ派を中心に、ウアイシェシカ派、ミーマンサー派の認識論を取り上げる。初めに、直接知覚は感官と対象との接触から生じた知であるという『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāya-sūtra) の定義を巡って、ウァーッシャーヤナ (Vaiśāṇāyana) ウァドモータカラ (Uddyotakara) の解釈が論じられ、『ウアイシェシカ・スートラ』、『ミーマンサー・スートラ』(Mīmāṃsā-sūtra) の直接知覚説にも言及する。さらに、『ニヤーヤ・スートラ』の直接知覚の定義における「表示されない」(avyapadeśya) という語について、無分別知を「語(概念)を伴わない知(直接知覚)」と解するジャヤンタ・バッタ (Jayanta-bhāṭya) の説が中心に述べられる。そして、判断を欠く直接知覚 (nirvikalpa pratyakṣa 無分別現量) に関して、ウアイシェシカ、ニヤーヤ両派の諸解釈に基づく議論が展開される。

「第3節 二元論学派の認識の構造」では、サンンクヤ派(及びヨーガ派)の認識論が問題とされる。最初に、サンンクヤ派を中心に種々の直接知覚の定義について検討し、直接知覚の知は対象に対する決定知 (adhyavasāya) であり、覚 (buddhi) に含まれると結論している。次に『ユクティ・ディーピカー』(Yukti-dīpikā)、『タットヴァ・カウムデー』(Tattva-kauṇḍī)

の直接知覚説について、前者が感官と覚による二種の直接知覚を認めるのに対し、後者は第二の覚による直観、即ち貪等の認識とヨーガ行者の認識を直接知覚から除くこと等が、精緻な論議の下に述べられる。また、ヨーガ派の直接知覚説及び心(citta)と靈我との関係を、『ヨーガ・スートラ』(Yoga-sūtra)の諸注釈に見られる映像説をもって解釈している。

「第4節 一元論学派の認識論」では、まず、真の自己(我)を探索するシャンカラについて、『ウパデーシャ・サーハスリ』(Upaniṣad-sāhastri)に依りながら、その直接知覚の構造を論述している。加えて、シャンカラと同じ不二元論の系譜にあるダルマラージャ・アドヴァリーンドラ(Dharmarāja-dhvarindra)は、唯一なる精神性(caitanya)の映像として個我の精神性を捉え、その精神性のあり方によって認識の構造を説明することが示される。一方ラーマヌジャ派の認識論として、有差別の世界を認識対象とし、無分別、有分別に区別される直接知覚の両方が限定されたものを捉えんとするラーマヌジャ自身の説と、それを改めて解釈したものを要約したシュリーニヴァーサ(Śrī-nivāsa)の主張が説かれている。

「第5節 ジャイナナの知識論」では、最初にジャイナ教独特な相對論(syād-vada)、即ち物事を一方的に見ずに多方面から見る考え方(不定主義 anekāntika-vada)について言及する。次に、ウマスヴアーティ(Umasvāti)による知識論の体系が示され、感官知を間接知(parokṣa)とする等認識手段としての知の分類の特徴や、知覚(avagraha)による認識の過程が示

される。そして後代のものとして、ヘーマチャンドラ(Hemacandra)の知識論をその著作 *Pramāṇa-mīmāṃsā* によって紹介する。ここでは、記憶(smṛti)や再認識(pratyabhiñjana)を認識手段とする等他学派にはない特色や、ジャイナ教内における知識論の構造の推移が知られる。正統派哲学に加えて、近年資料的にも注目されているジャイナ教の認識論を取り上げることを評価したい。

第6節では「真知論と誤知論と懷疑論」が、認識論上の課題として取り上げられる。真知論(pramāṇya-vada、真偽決定方法論)は、知(認識)の真偽の決定に関する議論を扱う。なかでも知の「真」は自律的に成立し、「偽」は他律的に成立するというミーマンサー派と、知の「真」と「偽」とは他律的に成立するというニヤーヤ派の間で、立論と批判の応酬がなされている。続いて、直接知覚において誤知はどうして生じるのかということに関する理論 khyati-vada (知識論) が扱われる。ここでは、バーサルヴァジュニヤ(Bhāsarvajña)が著した『ニヤーヤ・ブーシャナ』(Nyāya-bhāṣana)によって、八種の誤知論が示されている。懷疑論・不可知論としては、六師外道の一人サンジャヤ(Saṅjaya Belatīhi Putta)の判断停止や仏教の無記、否定の論理を繰り返す中観派の主張、さらには、ローカータ系列のジャヤラーシ(Jayarāsi)による諸原理の徹底批判、シャンカラ派に属するシュリーハルシャ(Śrī Harsa)の不可説論を取り上げる。以上は、これまでの一般概論書にはあまり紹介されておらず、本書の特筆すべき点のひとつである。

終章として「余論」では、存在論と認識論以外の諸問題に簡単に触れる。解脱論や倫理学といった実践哲学、言語の哲学的考察に続き、文芸論（詩学）や演劇論という美学の問題について述べられる。歴史観としては、輪廻や世界の周期的な生滅等循環的反复的な時間の観念が、インド思想に広く浸透していることが指摘される。また、最後に研究の手引きとして、原典や参考文献の所在を知るための書目を紹介しており、初学者への配慮はここにも現れている。

以上が本書の全容である。著者が惜しむように、シヴァ教各派や新正理学派等ほとんど触れられていないものもあるが、主要な哲学思想は網羅しており、インドの哲学体系の概要を知る上で何ら支障はないであろう。

なお巻末には、利用者の便宜を充分に考えた年表、索引が付されている。このうち年表は学派別に並記され、各事項の時代的な位置付けが他学派のそれとの比較の上で把握できるので、補助資料として非常に有効である。一方索引は重要語を太字で表し、和漢語索引には原語が添えられる等細かな気配りが見られる。

インド学研究の現状は、限られた分野の研究に埋没して、それ以外は門外漢で事足れりとする安易な傾向にある。この点に

ついては、筆者も含めて研究者自らの姿勢が問い直されなければならぬだろう。ただし、こうした課題の克服には、領域を問わない巨視的な眼と網羅的な学習が必要である。その意味で、新しい試みの本書をものにした著者の高い見識と研究への熱意には、頭の下がる思いである。その学問に対する真摯な姿勢に敬意を表さずにはおれない。

さらに、インド哲学を専門とする者だけではなく、仏教研究者が本書を利用することにより、学問の視野を広げていくことを期待したい。仏教もまた、他の諸学派との論争を通して自説を構築してきたことは歴史の物語るところである。仏教の成立発展に直接間接に影響を与えてきた周辺のインド諸哲学の知識も、仏教研究において不可欠の要素ではないだろうか。同時に、仏教文献と他の諸学派の資料との比較研究は、今後大いに注目すべき課題であろう。

本書は、もちろん概説書としても利用価値の高いものである。しかしながら断片的な知識を求めるだけに留まらず、広い視野からインド思想を捉えようとする時、本書は格好の指南役として、さらに有益に機能するものと思われる。

一九九一年九月一日刊 平楽寺書店 A5判  
[X十四五一頁 定価七六〇〇円]